



# 上層中産階級の女性作家としてのヴァージニア・ウルフー—二項対立的概念への挑戦とその限界

梅田, 杏奈

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2024-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8519号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482267>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 論 文 内 容 の 要 旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

上層中産階級の女性作家としてのヴァージニア・ウルフ  
——二項対立的概念への挑戦とその限界

氏 名 : 梅田杏奈

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 奥村沙矢香 准教授

(副) 山本 秀行 教授

(副) 大橋 完太郎 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

本研究はヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の病と同性愛、そして階級を中心とした問題について分析し、ウルフが上層中産階級出身であるという社会的な後ろ盾を持ちながらもその恩恵には盲目であったことから、ウルフの限界のひとつとして階級の問題があることを明らかにする試みである。この研究によって、ウルフの二項対立的構造の崩壊という試みがある程度の自由の利く上層中産階級の女性作家であるが故に許容されたものであることが明らかとなる。特に医師を悪人に仕立て上げ、同性へのラブレターを出版しても咎められなかったという観点から、ウルフの社会的な恩恵について分析を行う。そして労働者に対する非共感的な態度から、ウルフには上層中産階級の女性作家としての誇りが見られることを 20 世紀イングランドの文化や法律など時代背景も含めて考察し論じる。

ウルフは 20 世紀初頭にイングランドで活躍した女性作家である。しかし、それだけでなく精神疾患や同性愛といった観点からも注目を集める女性である。ジェンダーや性的マイノリティといった話題に我々自身が敏感になったことから、作者自身が見直されるのも当然の流れといえる。例えば、ウルフが 10 代の頃から精神科医に掛かっていたことや、自殺未遂を繰り返していたこと、1941 年には入水自殺を遂げたという事実から、医師をはじめとした男性優位な社会的圧力の被害者であるといった見方がある。同性愛という観点から言えば、詩人ヴィタ・サックヴィル＝ウェスト (Vita Sackville-West) が最も有名な恋人であろう。ふたりの間でやり取りされた手紙はラブレターとして編纂され、出版もされている。ほとんどの場合、こういった病と同性愛という問題は別々に論じられてきた。しかし、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) 的に見れば、それらは共に監視される者であったことを考慮し、本研究ではあえてふたつを並列させて扱っている。20 世紀初頭イングランドの精神医学的見解を鑑みても、共に「狂気」として排除された存在であり、少なくとも「自然に反する者」や「不自然な存在」として社会から隔てられていた事実を無視することはできない。多様性を賛美する今でこそ、このような考えは不当だとの主張が支持を得やすいが、20 世紀初頭イングランドにおいて、精神病及び同性愛がいかに問題として捉えられていたのだろうか。この疑問を明らかにするため、文化的な背景についても整理する必要がある。そして、それらふたつの要素を持ちつつ社会から排除されなかったウルフの矛盾及び戦略家の一面を暴き、それを可能にしたひとつの理由として階級があることを明らかにする。

ウルフに対する社会的な配慮及び優越について論じるため、序論では 20 世紀初頭のイングランドにおける階級の位置づけについて明らかにする。階級の区分は大まかに 3 つに分かれており、貴族を中心としたアッパー・クラスと呼ばれる上流階級、ミドル・クラスこと中産階級、そしてロウワー・クラスと呼ばれる労働者を中心とした下層階級があった。構成人数は下に行くほど多く、貴族は少ない。この階級の区分は家柄や収入などによってある程度明確にされていたが、第一次大戦の影響も少なからず受けたことで貴族が凋落し、また労働者たちの生活が豊かになることで、次第に均衡が破れることになる。ウルフについて言えば、ウルフの父親が文学や学問に精通した人物であり、辞書の編纂なども行っていたことから、中産階級の中でも上層中産階級という上位の階級に属した家系の出身である。そしてウ

ルフの労働者に対する視線は厳しく、表面的な同情を感じるものの決して共感はできないとすら断言しているのである。

第1章では、作品に描かれた医師の表象について分析を試みる。ウルフが描く医師といえば、『ダロウェイ夫人』(Mrs Dalloway, 1925)に登場するふたりの悪徳精神科医ホームズ医師(Dr Holmes)とブラッドショー(Sir William Bradshaw)、及び彼らの患者であるセプティマス(Septimus Warren Smith)の分析に関心が集まるが、その10年前に出版された初めての長編小説『船出』(The Voyage Out, 1915)にも、同様にふたりの医師が登場している。しかし、存在感が薄いためか、あまり注目はされていない。また、『ダロウェイ夫人』にはまだ医師ではないが、医師になることを夢見る少女として、主人公の娘エリザベス(Elizabeth Dalloway)が登場する。本論では『ダロウェイ夫人』の医師の表象だけでなく、彼らと深く関わる患者セプティマス、また医師を志すエリザベスに加え、『船出』に描かれた医師たちにも焦点を当てて、医師という正気に隠された狂気や他者を縛るレッテルについて暴く。

続く第2章では狂気そのものについて、ウルフが実際に精神科に掛かっていた20世紀初頭当時の医学的な時代背景も含めて考察し、権力との関係についてウルフの作品とも関連付けながら分析を行う。なかでも、ウルフの自殺未遂に挟まれた9年間(1904年から13年)にわたって主治医を努めたジョージ・ヘンリー・サヴェッジ(George Henry Savege)の論文や著書を中心に分析を行うことで、この医師の医学的見解とウルフへの対応に見られる矛盾を暴き、狂気とは医師の匙加減で決められたことを明らかにする。また、その矛盾には権力の影が潜んでいると考えられることから、再び『ダロウェイ夫人』の分析に戻り、そこに描かれた狂気が狂気となりえない例として、大衆と権威の描写というふたつの観点から分析し、新たな読みを提示する。

第3章では精神病患者と同じく社会から排除された存在であり、またウルフの特徴のひとつとしても挙げられる同性愛について取り上げる。特に19世紀末から20世紀にかけてイングランドでは性科学が発展し、同性愛の存在が悪や罪ではないことを説く出版物も現れ始める。そんな中、ローズ・アラティーニ(Rose Allatini)やラドクリフ・ホール(Radclyffe Hall)といった作家たちは同性愛を描いた小説を書き、裁判沙汰に発展したのち出版禁止の処分を受けた。ウルフについて言えば、ホールと同年にヴィタへのラブレターとされる『オーランドー』(Orlando: A Biography, 1928)という小説を出版しているが、出版禁止など法的な処分は受けていない。この違いについて考察するため、20世紀初頭における同性愛の位置づけや性科学、また服装倒錯という観点からホールの著書『孤独の井戸』とも比較しながら『オーランドー』について分析を行い、作家として社会と駆け引きするウルフの一面及びホールとの「性」に対する視点の違いがあることを明らかにする。

以上の分析を踏まえ、第4章においてはウルフが超えられなかったものとして階級があることを提示する。『オーランドー』において男女両方の性を行き来する主人公オーランドーは、ひとりの人間の内にふたつの性が混在するという点で、まさに両性具有を体現してい

る典型的な人物と考えられる。そして、この両性具有という概念をひとつの社会に置き換えて考えたとき、ふたつの性が協力し合う社会は両性具有的な社会と言えるのではないだろうか。しかし、ウルフがこのように男女が互いに助け合う両性具有的な社会を理想としている一方で、その理想には労働者階級や貧困層の人間は入っていない。あくまでも自立した「教育のある男性の娘」、つまり中産階級以上の経済的に余裕のある人間しか含まれていないのである。この閉鎖的な連帯感は、「わたしたち」(we) というまとまりを形成し、他者を批判する姿勢にうかがい知れる。女性を被害者として位置付けて、同情を誘うのである。そしてこの言葉は、同時に「あなたがた」(you) という敵を生み出す。それだけでなく、「わたしたち」が目指す芸術の向上ひいては世界平和の実現に貧乏人は不要とし、労働者たちを排除する。労働者階級に対する冷たい視線についてはこれまでもたびたび研究されてきたものの、本論文ではエッセイだけでなく、『夜と昼』(Night and Day, 1919) や『ダロウェイ夫人』といった作品に描かれた大衆という観点からも分析を行い、個性がなく群れをなすというその大衆の描写の特徴から、ウルフの作品に描かれた階級の隔たりについても探る。

病や同性愛について正気／狂気や男／女の境界を打破し、二項対立的構造を超越したように思われるウルフであるが、階級という点を踏まえて考えた時、そこには精神病患者ウルフに対する社会的な配慮が見られるのである。ウルフは決して多様性を謳ってなどいない。父親や夫の庇護の元、それによって齎される上層中産階級という社会的な地位を手放すことなく執筆を続けていることや、「わたしたち」といった閉鎖的な言葉に見られる貧困蔑視の態度からは階級の壁があることがうかがえ、ウルフが終には上層中産階級の女性であるという枠組みから脱却できなかったことを物語っているのである。女性の地位向上を訴えながら精神病や同性愛などのレッテルも抱えて共に抑圧に苦しんだ女性といった、近年理想化されつつある「男性権力に抗い弱者に寄り添う作家」というような美化されたウルフ像に疑問を呈し、ウルフが上層中産階級という地位に君臨しているという点に注目し、戦略的な女性であることを暴いたものである。

3685 字／4000 字

## 論文審査の結果の要旨

氏名	梅田 杏奈
論文題目	上層中産階級の女性作家としてのヴァージニア・ウルフ——二項対立的概念への挑戦とその限界

## 要 旨

本論文は20世紀初頭イギリスの作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の長編小説および代表的エッセーを、作家の伝記的事実および作品群において重要なテーマを成すところの精神疾患と同性愛に注目して論じたものである。この二つのテーマは当該作家研究においてすでに様々に論じられてきているが、これまで共に考察されることはなかった。本論文は20世紀初頭イギリスの精神医学的見解において、精神疾患と同性愛がいずれも不自然な現象もしくは「狂気」として捉えられていたという事実から、この二つを共に探究することは大いに意義がある、と主張している。とりわけ、この二つが社会文化的に忌避される根拠となっている正気/狂気、男/女の性の二項対立概念がいかに恣意的に作り出されたものであるかということ、ウルフが作品を通じて繰り返し表明している点は着目に値する、としている。本論文はまた、ウルフが精神疾患と同性愛の問題に関心を向けていた背景として、作家自身がその二つの傾向性を有していたという事実があることを指摘している。したがって、二つの問題の根幹を成す二項対立概念にウルフが疑念を表明するとき、それは社会文化的な自己弁護の意味合いを帯びるはずである。しかし、実際には、ウルフは精神疾患を患う者および同性愛者のひとりとして、社会文化的に排除された存在であるわけではなかった。その理由は、ウルフが上層中産階級というイギリスの特権階級に属していたことにより、世間の批判を免れやすい立場にあったためである、と執筆者は主張している。本論文は二項対立概念へのウルフの挑戦が、ウルフ自身も十分に自覚し得ていなかった特権階級としての立場によって、皮肉にもある種の限界を示している、ということをも明らかにする試みである。

本論文は以上を「序論」とし、以下、ウルフによる数本の作品をそれぞれ扱った4つの章と、論文全体をまとめた「結論」によって構成されている。

論文の第1章はウルフの第1作目の長編『船出』(The Voyage Out) と第4作目の長編『ダロウェイ夫人』(Mrs Dalloway) を取り上げ、両作品に登場する二人の医師の描かれ方に注目している。本章はウルフの描く医師らが患者を救済することができずに終わるばかりか、時に患者を精神的に追い詰めて自殺にまで至らしめる加害者であることを重視し、そうした描写には、精神を患う患者として医師に関わり、医師から施される療法に疑問を感じることもあったと言われる作家自身が常日頃から抱いていた当時の医学に対する不信感が表れている、と指摘している。本章は特に、精神科の医師が重視する正気と狂気の二項対立概念が恣意的かつ曖昧な性質のものに過ぎないということ、テキスト中の医師像およびその他の作中人物の意識の有り様を分析することを通して掘り出している。本章は時として安易な一般論に陥るといった短所を有するものの、第1作目から第4作目にかけて医師像が発展的に描かれていることを指摘することを通して、医学に対する作家の並々ならぬ関心を強調し得た点に独創性が見受けられる。

第2章は第1章で議論された正気/狂気のバイナリズムの問題を、20世紀初頭の医学的事情に照らし合わせて考察している。当時は精神医学が発展途上であったため、各々の医師の上観や偏見が診断結果に反映されることも少なくなかった。そのため、正気と狂気の区別も恣意的なものになりがちであった、と本章は指摘している。ウルフに関して言えば、主治医のジョージ・ヘンリー・サヴェッジ (George Henry Savage) がウルフに明らかな精神異常を認めていたにも関わらず、論文や著書を通して自らが主張していた医学的処置 (すなわち精神異常者の隔離) をウルフ

主査記載  
氏名 (白署)

山本 秀行

フには施さなかった、という事実がある。この背景には、特権階級に属するウルフに対する、サヴェッジ医師の個人的な配慮があったのではないかと本章は推察している。このような伝記的考察に基づき、本章は、正気/狂気の二項対立概念に対するウルフの疑念が20世紀初頭当時の医学の実情をついたものであること、しかしながらウルフ自身は特権階級という社会的地位によって医学の犠牲となることから免れていたという点で、その医学批判は説得力に欠けるものであること、を指摘している。この最後の指摘については妥当性にやや疑問が残るものの、ウルフの主治医サヴェッジの言動に関する詳細な考察は他に類をみないものであるという点で、本章は評価に値する。

第3章は、同性愛をめぐる議論とウルフとの関係性について論じている。本章はまず、イギリスでは19世紀末から20世紀にかけての性科学の発展を背景に、同性愛が「自然に反する」現象であるという前世紀までの認識の誤りを説く出版物が現れ始めたという歴史的事実に注目している。しかしながら、同時期に出た同性愛を主題とする小説は物議を醸すことが多く、例えばローズ・アラティーニ (Rose Allatini) やラドクリフ・ホール (Radclyffe Hall) といった作家らの小説は裁判にかけられ、出版禁止の処分を受けている。本章は、そのような中、ウルフ自身の同性愛的傾向が反映された小説『オーランドー』(Orlando) が法的な処分を免れて出版されたばかりでなく、世間の譴責をも免れたという事実に着目し、その理由を論じている。他の作家が男女の性の区別に拘泥する主人公を描く一方で、ウルフは男女の性を超越した両性具有的主人公を作り上げることで、自らのセクシャリティを隠蔽し得たから、というのが本章の説明である。本章は、前章までに引き続いて二項対立概念に対するウルフの疑念を明らかにしているものの、それが階級的な限界にどのように結びつくのかという点に言及し得ていない。しかし、ウルフの小説を同時代の作家による類似テーマの小説との比較を通して社会文化的に位置づけた点で、貴重な試みと見做すことができる。

ウルフの代表的なエッセー『自分ひとりの部屋』(A Room of One's Own) と『三ギニー』(Three Guineas) を取り上げた第4章は、先に出た『オーランドー』で打ち出された両性具有的精神が、理想の社会の構築の仕方について論じた両エッセーのなかで発展的に示されている、ということを指摘している。他方、本章は、ウルフが時として女性を「わたしたち」、男性を「あなたがた」と呼ぶことによって、男女の性を明確に区別する姿勢を打ち出しているという点に両性具有に関するウルフの思想の限界が見出されるということ、更には女性の「わたしたち」は著者自身を含む「教育のある男性の娘」、すなわち社会の特権階級に属する女性のみを対象とすることから、労働者階級の女性を除外するという排他性を帯びていることを指摘している。本章は先行研究を踏まえるという手続きを怠っている点に問題はあっても、緻密なテキスト分析を通して本作品を読み解いている点を高く評価することができる。

以上のように、ウルフは著作物を通して同時代の二項対立概念の突き崩しを試みたが、上層中産階級という特権的な社会的地位によって時としてその試みが阻まれることがあった、と本論文は結論づけている。

本論文には議論の妥当性や整合性の点でいくつかの問題が見受けられる。しかしながら、国際的に評価され続けるウルフという作家の思想的限界を示すという本論文の野心的な試みは、執筆者の確かな探究心の証左であるといえる。

以上の審査結果により、審査委員会は論文提出者梅田杏奈が博士(文学)の学位を授与されるに値するとの結論に達した。

## 審査委員

区分	職名	氏名(自署)	区分	職名	氏名(自署)
主査	教授	峠 秀行	副査	准教授	奥村 沙矢香
副査	教授	荻津 加代	副査	助教	平川 和
副査	教授	大橋 完二郎			